

弁護士1年目を終えて

会員 井ノ上 奈莉子

1 はじめに

先日、クライアントとの会話の中で、弁護士になって何年目ですかという質問をいただいた。まだ1年目ですと答えようとして、既に入所から1年が経過したことに気が付き、少し言葉に詰まりながら2年目ですと答えた。本稿では、弁護士1年目を終えてみて、その振り返りをするとともに、2年目をどう過ごすか、自分なりに考えたところを述べたいと思う。

2 弁護士1年目の所感

総じて弁護士1年目は、そつなくこなせたことはほとんどなく、何をするにも時間がかかり、立ち止まってばかりだった。

2020年12月17日、弁護士登録をした日は、ようやく弁護士になれたことに喜びを感じると同時に、前日までは学生に毛が生えたような存在であったことを思うととても奇妙な気持ちで、現実味がなかった。事務所に入所してしばらくは、「先生」と呼ばれる度になんだか申し訳ないような気持ちになり、内心縮こまっていた。

徐々に「先生」と呼ばれることにも慣れ、研修期間が明けると、いよいよ社会に出ることになった。社会人として当然に身につけているべき常識を大慌てで習得しながら、日々弁護士としての業務にも追われ、飛ぶように季節が過ぎていった。名刺交換の手順を必死に調べていた春先の自分を思い出すと、遠い昔のこのように懐かしい。

そして、弁護士登録をしてから1年が経つ頃になっても、まだまだ自分は未熟で、日々目の前の仕事をこなすのに精一杯だった（今でも状況はあまり変わっていない）。周囲の1年生と仕事の話をする、

同じ新人でも仕事が楽しくて仕方がないと言う人もいて、そんな話を聞いた後は、自分の成長が遅いのかとこっそり落ち込むこともあった。コロナ禍の真っ只中に入所した私は、そういった悩みを口にする機会もないまま、弁護士1年目を終えようとしていた。

そんな中、偶然、事務所の先輩弁護士の新人時代のお話を伺う機会に恵まれた。先輩いわく、最初の3年間は辛いことばかりで、仕事が全く楽しくなかった、とのことだった。

私はその言葉に驚くと同時に、今は仕事を楽しくなくてもいい、ということにとても安心した。私の目には完璧に映る先輩にも、やはり苦しい時期はあって、それを乗り越えて今のご活躍があるのだと知ることができ、焦る気持ちが和らいだ。勿論、今仕事が楽しい人が道を誤っているということではなく、ただ、人にはそれぞれの成長過程があって、日々の出来事の受け止め方も人それぞれである、ということが分かったのである。私は器用ではなく、何でも時間がかかる性質で、毎日自分にもどかしさを感じて落ち込むが、それでもいいと思えた。

3 弁護士2年目の抱負

私の弁護士人生2年目は、まだ始まったばかりである。2年目も、おそらく日々思い通りにならず落ち込むことはあると思う。けれども、落ち込みながらも、より良い自分になることを目指し、日々をフルスイングで生きること集中して、とにかく諦めずに、また1年頑張ろうと思う。このエッセイが、私と同じような1年目を過ごした人の目に留まり、少しでもその孤独感が和らぐことを願って、筆を置きたい。